



四旬節第4主日 (ヨハネ 9:1-41)

主よ、その方を信じたいのです

「あなたは人の子を信じるか」(9・35) イエスが生まれつき目の不自由な人をいやし、投げかけた言葉です。目の前におられる方が探し求めている方ですが、まだ気づいていません。私たちもこのいやしを受けた人に自分を重ねて、与えられた福音朗読から糧を得ることにしましょう。

今日は皆さんにオヤジギャグではなくて真剣にお祈りをお願いしたいです。田平修道院のシスター久松カヲが、生死の境にあります。このお知らせも刻一刻と変化する中なので、もしかしたら違う報告をしなければならぬかも知れません。この説教を書き終えた時点では、シスターは生死の境にあります。田平修道院の礎となってくださった姉妹ですから、ぜひ皆さんの祈りをお願いいたします。

もう一つのお知らせは、黙想会です。何とか、黙想会を開催できる運びとなりました。同じ日程で浦上教会は黙想会を中止する判断をしたそうです。それぞれの教会が抱えている「事情」がありますから一概には言えませんが、田平教会は黙想会を実施します。実際は、日曜日のミサに参加するよりも長い時間集団で一つの場所にいるのですから、最大限警戒しながら、無事に終えたいなと思っています。説教師の都合で中止になることもあり得たわけですから、ある意味、説教師を外に依頼していなくて良かったです。

福音朗読に戻りましょう。登場する「生まれつき目の不自由な人」は、復活したイエスがトマスとのやりとりで言われた「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ 20・29) ここで言う「見ないのに信じる人は幸いである」まさにそのままの人と言えるでしょう。

「期待を膨らませる」というのは、見ないほうが効果的なのかも知れません。イエスのいやしのわざで目の不自由な人は見えるようになったわけですが、期待が膨らむ過程ではイエスを見ていないのです。むしろ見ないほうが、思いが募り、さらに憧れが増すのかも知れません。

「見ていない」ということが幸いするケースを私たちは少なからず知っています。富士山は登山した人なら分かりますが、世界遺産と言いながら、実際にはたくさんのゴミが目に残るのだそうです。「ベツレヘム」と聞けば、「イエス様が誕生した町だから、キリスト教が盛んだろう」と思うでしょう。

ですが実際にはベツレヘムは「パレスチナ自治政府」の土地であり、聖地巡礼なのにパスポートがなければ入ることができず、まれに入国することすらできないときもあります。ついでに言えば、ベツレヘムではユダヤ教の食事はあまり見ません。私たちが日常食べるバーベキューのような料理が出てきます。イエス様が生まれた当時の、ユダヤ教の土地ではないのです。これからベツレヘムに巡礼する人がもしいるなら、が

っかりさせたかも知れません。

結局、見ないで信じるほうが、余計なことを考えずに受け入れやすいこともあります。そしていざ事実を見たときに、見ないで信じていたことが試されてきます。富士山が美しくないのであれば、見て信じられるような美しさを取り戻すために清掃活動の登山をすればよい。ベツレヘムの領有権争いに幻滅せず、イエスが誕生してくれたことを現実の向こうに見て、感謝すればよい。私たちは見ないで信じることが多いですが、仮に現実を見たとしても、本当に信じる人には何も妨げにはならないのです。

生まれつき目の不自由な人もそうでした。いやしの恵みを受け、イエスという方がファリサイ派の人々から罪人と決めつけられているのを知ります。自分自身もイエスを預言者と認めれば、会堂から追放されることが目に見えています。困難があるにもかかわらず、さらにイエスに近づきたいと思うようになったのです。

「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」

(9・36) 視力を回復してもらった人は、恐れを乗り越え、試練がイエスへの信仰を固めてくれました。このいやされた人は、わたしたちがより信仰を増してもらおうためのお手本です。私たちも、恐れや試練を経て、イエスから信仰を増してもらえるのです。

神学校で生活していたとき、神学生みなが同じ気持ちで生活しているわけではないと気づいた瞬間がありました。神学校を隠れ蓑に、勝手な生活をしている学生もいました。嫌気が差して、私自身もやる気を失ったことがありました。

現実はそのようですが、現実の向こうにあるものを希望させる出来事にもときどき触れることがありました。その一つは、今は司教様となった白浜司教様です。先輩は大神学校に進んでから身体を壊し、確か休学したと思います。休学中、浦上教会でお世話になっていたと思いますが、小神学校にも立ち寄ってくれました。

あんなに真面目な、聖人とまで言われていた人が挫折して、また復帰に向けて準備している。それは私にとって大きな励みになりました。現実にはドロドロしていましたが、それでも「召命の道をもう少し信じてみよう」という気になり、歩み続けることになったのだと思います。

信仰生活に嫌気が差すときが誰しもあるかも知れません。その時こそ問い直すのです。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」悲しい思いをしても信じる甲斐がある方でしょうか。裏切られても、信じ続ける価値のある方でしょうか。イエスの答えはこうです。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」(9・37) イエスは、私たちがどん底にいても、寄り添って声をかけてくださる方です。